

知的障害児のリズム同期と合奏指導のための教材開発研究

齋藤一雄

目的

知的障害児のリズム同期と合奏指導のために実態把握を行い、児童の実態に即した自作の教材開発を行う。そして、実際に知的障害養護学校小学部における授業を実施し、その成果を検討する。

結果

児童それぞれの最速テンポの平均は170～204であり、手拍子を続ける持続力に弱さがみられた。3つのテンポに対しては、遅いテンポから速くなると同期できた割合が小さくなる傾向がみられた。リズムパターンへの同期については、個々の児童によって異なる結果がみられた。自作曲は「手をたたこう」（四分音7拍と四分休符1拍によるリズムパターンの拍打ち）と「手拍子パン」（四分音の拍打ち）の2曲を実際に授業で行った。歌詞と動作が一致するようにした「手をたたこう」では、3人が動作とかけ声が最初の段階からでき、2人は教師の支援が必要であった。「手拍子パン」では、「パン」に合わせて手拍子することができ、後半の拍打ちも5人とも取り組むことができた。かけ声とこぶしをあげる動作、歌詞に合わせてタイミングをとって手をたたく活動は、リズム反応への興味関心を高め、積極的な反応をひき出すことができた。

方法

養護学校小学部高学年の学級（児童5人MNOPQ）を対象に、リズム同期に関する実態把握（最速手拍子、3つのテンポへの同期、2種のリズムパターンへの同期）を行い、2曲自作し、2005年6～7月に12回授業を実施した。毎回VTRで授業を記録し、児童個々に手拍子の結果を楽譜におこし、同期した拍数と割合を求め、誤反応の分析を行った。

内容

1. 知的障害児を対象としたリズム同期の教材

知的障害児を対象としたリズム同期においては、歌唱教材に合わせて拍打ちしたり、歌詞にある擬音などのパターンに合わせて楽器を鳴らしたりすることが多くみられる。歌唱教材をリズム指導に使用することは、児童が曲を知っている、歌詞とリズムパターンが一致している、歌唱より手拍子等のほうが

親しみやすいなどの点で有効である。

しかし、児童のリズム同期の実態に合わせて作られているわけではない。曲が長すぎたり、テンポが速かったり、リズムパターンが複雑であったり変化したりするなどの問題がみられる。そこで、知的障害児の実態をとらえ、リズム同期を課題とした曲の自作や合奏しやすい編曲など教材開発を行うことが必要であると考えた。

2. 知的障害児を対象としたリズム同期の実態把握

実態把握の項目は、宇佐川（1984）、齋藤・齋藤（1997）、齋藤（1995、2004）、武田（2004）、西田（2005）などを参考にして、手拍子し続けることができる最大限の速度、3種のテンポに同期、四分音と休符の組み合わせによるリズムパターンに同期することを取り上げた。

児童それぞれの最速テンポの平均は170～204であり、手拍子をするパフォーマンスには問題はなかった。多少、最速で手拍子を続けることに課題がみられた。

3種のテンポには、部分的にも同期することができ、特に大きな問題点はなかった。テンポ別にみると、MNOPにおいて160bpmのテンポに対して同期できた割合が小さくなる傾向がみられた。

2種のリズムパターンについては、部分的に同期することができていたが、リズムパターンの種類によって、個々の児童によって異なる結果がみられた。

3. 教材開発した楽曲等を活用した授業の展開

「元気な声で、すてきな音で」という単元名で、始めに「頭の上でパン」（おざわたつゆき作詞・作曲）の曲で身体表現し、自作曲によるリズム打ちを行う。次に、「カレーライス」（ともろぎゆきお作詞・峯陽作曲）「大きなうた」（中島光一作詞・作曲）を元気な声で歌い、季節や行事に合わせて「あめふりくまのこ」（鶴見正夫作詞・湯山昭作曲）や「ツッピンとびうお」（中村千栄子作詞・櫻井順作曲）の曲で歌詞と視覚的なイメージを重ねながら歌うことを課題とした。「シンコペイテッド・クロック」（ルロイ・アンダーソン作曲）「アビニョンの橋で」（フランス民謡）の曲では、鑑賞するだけではなく、ウッドブロックや鍵盤ハーモニカの演奏を合わせて行うことにした。

4. 自作曲によるリズム同期の結果

(1) 自作曲「手をたたこう」

自作曲「手をたたこう」は、4/4 拍子 8 小節の短い曲で、四分音 7 拍と四分休符 1 拍によるリズムパターンへの同期を課題とした。曲の構成は、「手をたたこう」の歌詞の後に「オーッ」といってこぶしをつきあげる動作を入れ、四分音 7 拍と四分休符 1 拍によるリズムパターンを組み合わせた。

歌詞と動作が一致するようにした結果、MNO は動作とかけ声が最初の段階から教師を模倣してできた。しかし、PQ は教師の支援がないと取り組むことができなかった。

リズムパターンは、四分音の連続と最後に四分休符を加えたものだが、ここでも MO はほとんど同期できていた。「オーッ」への反応がよかった N は、手拍子しているが同期できず、8～10 回速く手拍子してしまうことがみられた。

PQ は数回同期することができた。P は、「オーッ」の部分から四分音で手拍子し続けることが多くみられ、リズムパターンのみで手拍子したわけではない。しかし、正確にテンポをとらえて手拍子していた。また、四分休符で手拍子を止めることができていなかった。Q は、耳ふさぎなどをしていて、取り組まないことが多かった。

(2) 自作曲「手拍子パン」

自作曲「手拍子パン」も 4/4 拍子 8 小節の短い曲とし、落ち着いた雰囲気の中かで、4 小節四分音の拍打ちをすることを課題とした。

曲の構成は、「手拍子パン」の歌詞の中かの「パン」に合わせて手拍子することを 4 回くり返し、後半 4 小節は四分音の拍打ちを課題とした。

歌詞と手拍子する部分はすぐにつかむことができ、児童 5 人とも取り組むことができた。MO は、前半部分の「パン」に合わせて手拍子することは確実にできていた。Q は、最初の段階では耳ふさぎが多く、取り組まないこともあったが、3 回目から取り組むようになった。N は 2 拍 (6 回)、3 拍 (3 回)、4 拍 (5 回) 手拍子することもあったが、取り組まないことも 12 回あった。P は取り組まないことも多く、4 拍手拍子を続けることもみられたが、3 回だけ正確に合わせて手拍子した。

後半の四分音に合わせて手拍子する部分では、N は手拍子しているが合わないことが多く、やめてし

まうこともあり、「ちょっとまった」と発言する場面もみられた。N は手拍子が合っていないことがわかり、どうにかしようとしてもうまくいかないとあきらめ、やめてしまうという解決策をとったと考える。O は合わせていたが、休みや八分音が入ってしまうことがみられた。M も、休みや八分音が入ってしまうことがみられた。PQ も休みや八分音が入ってしまうことが多く、取り組まないこともみられた。

5. 自作曲の活用と児童の反応について

自作曲で用いたかけ声とこぶしをあげる動作、歌詞に合わせてタイミングをとって手をたたく活動は、リズム反応への興味関心を高め、活動に取り組むエネルギーを引き出すことが、特に MNO にみられた。また、「手拍子パン」の「パン」の部分に Q が積極的な反応をみせたことも成果であったと考える。

3 組の児童の実態から、全員で取り組むことができ、個々の課題にせまることができる自作曲を 2 曲用意したが、児童の実態に幅があり、全員の課題を 1 曲に盛り込むむずかしさを感じられた。合奏のように、それぞれの出番や役割を考えた構成にしたり、個々の活動場面を設定したりするなどの工夫も必要であることがわかった。

参考文献

- 1) 宇佐川浩 (1984) 「音楽療法の発達論的検討」『障害児の成長と音楽』音楽之友社, pp. 65-85
- 2) 齋藤一雄・齋藤加代子 (1997) 『障害児のための音楽・リズム』明治図書.
- 3) 齋藤一雄 (1995) 「精神遅滞児のリズムパターンへの同期とテンポ」『埼玉大学教育実践研究指導センター紀要』, 8, pp. 1-9
- 4) 齋藤一雄 (2004) 「知的障害児のリズム反応における歌唱教材の活用」『上越教育大学研究紀要』, 24 (1), pp. 78-87
- 5) 武田陽子 (2004) 「肢体不自由養護学校におけるリズム同期を用いた音楽指導の実践紹介」日本特殊教育学会第 41 回大会自主シンポジウム 26 資料
- 6) 西田奈々 (2005) 「通常の学級における障害児への指導—障害児学級での取り組みの応用—」『学校音楽教育研究』, Vol. 9, pp. 25-27